

聖母よ、御腕を支えん

—— オフリド、パナギア・ペリブレプトス聖堂アプシスの旧約人物像について ——

益 田 朋 幸

O Virgin Mary, Let Us Support Your Arms:
the Old Testament Figures in the Apse of the Panagia Peribleptos Church in Ohrid

Tomoyuki MASUDA

Abstract

Here, the author discusses the meaning of the 26 Old-Testament figures represented around the apse of the Panagia Peribleptos Church in Ohrid, Macedonia (FYROM). The function of the great priests is emphasized (Aaron, Samuel, Zacharias, Melchizedek, Phinehas). The Trinity is prefigured by the three patriarchs, Abraham, Isaac and Jacob, while the twelve sons of Jacob symbolize the twelve apostles: the twelve apostles belong to the God of the Trinity as interpreted by Augustine.

Of particular interest is the presence of the prophet Hur (Ex. 17:10-12; 24:14), who is not so famous in the Christian tradition. Church fathers such as John Chrysostom, Augustine, and Gregory of Nazianzus read the episode of Hur (Ex. 17:10-12) as a typos of the Crucifixion. Byzantine manuscripts of the Octateuch represent the story with the composition of the Crucifixion. However, in the apse of the church, Hur supports the arm of the Virgin, not of Christ.

The grace brought by the Virgin Mary has been typologically connected with the image of water such as the water gushing from the rock of Horeb, induced by Moses (Ex. 17:6). Moreover, since the middle Byzantine period, the most prosperous Marian shrine in Constantinople, Blachernai Monastery, has been famous for the marble icon of the Virgin in an orans position, with water springing from her palms. Many towns in the Byzantine Empire have springs of the Virgin in this posture. In the apse, the Virgin prays eternally in an orans position with her raised arms giving water to the people in a metaphor of grace. Therefore, the prophet Hur, in addition to Aaron, supports Mary's arms and not those of Moses or Christ, to prevent the Virgin from tiring.

マケドニア共和国の古都オフリドは、透明度の高いオフリド湖畔に面した町である。湖を見下ろす高台にたたずむパナギア・ペレブレプトス (Panagia Peribleptos 祝福された聖母) 聖堂は、2004年まで聖クリメント聖堂の名で呼ばれていたが、オフリドの聖クリメントの遺骸が、新しくできた聖堂に^{トランスラティオ}移動して、オリジナルの献堂名に戻った。

メガス・エテリアルヒス Megas Hetaireiarches (ある種の役所の長) であるプロゴノス・ズグロス Progonos Sgouros と妻エウドキア Eudokia によって、1294/95年に建立されたことが献堂銘によっ

て明らかな、ビザンティン美術の基準作例である。しかもフレスコ中にはミハイル・アストラパス Michael Astrapas とエウティキオス Eutykhios という二人組の画家の署名が残っている。後期ビザンティン美術、すなわちパレオロゴス朝美術の劈頭を飾り、中規模のギリシア十字式聖堂の壁面全体にフレスコが残って、装飾プログラムの全体像を私たちに伝えてくれる貴重な作品である。

フレスコ装飾の全貌を記述し、論じようと思えば、大部のモノグラフが必要であるが、今日までそのような研究はなされてこなかった⁽¹⁾。足場を組ん

で壁画の細部を観察し、銘文を解読しなければ、モノグラフは不可能である。早稲田大学による調査申請は、これまでことごとくオフリド主教によって退けられてきたが、2010年8～9月にかけて、奇跡のように短期の調査許可が出た。その際慌ただしく撮影された写真をもとに、今後この聖堂の装飾プログラムを考える論考を書き継いでゆきたい⁽²⁾。

メダイオン人物像の記述

本稿で述べるのは、ごくささやかな図像に関する解釈である。アプシスにはオランスの聖母が堂々たる体躯で描かれ、その下には「使徒の聖体拝領」がペテロを先頭とするパンの場面（左）と、ヨハネを先頭とするワインの場面（右）に分割されて配される【図1】。主教聖人の半身像を描くフリーズ⁽³⁾を挟んで、床に接する最下段は典礼文を記した巻物を手にする主教・神学者たちが並ぶ。規模の大きい聖堂ゆえに、4段構成になっているが、アプシス図像として特異な点はない。

逆U字形の壁面がアプシスを囲んでおり、そこには計29個のメダイオンが均等に配され、上部の3つを除いて旧約の人物頭部が描かれている。ビザンティン聖堂に旧約の人物が登場するのは、ドーム下の鼓胴部にキリストやマリアを予型した預言者が配される程度で、本聖堂にも鼓胴部に12人の預言者が並ぶ。聖域という重要な場に、これほど多くの旧約人物を描くのは、これまで見られなかった現象である。画家がいかなる意図をもって、これらの人物を選び、並べたのかを考察するのが本稿の目的である。

煩瑣ながら、まず人物の同定を行なおう【図2】。1はIC XCとの略号が付された、十字架ニブスをもつインマヌエルのキリストである。アプシスのコンク上部にインマヌエルが描かれる例は少なくない⁽⁴⁾。その両側には大天使ガブリエル（2）、大天使ミカエル（16）が侍する。「聖母子、二大天使」の組み合わせは、ビザンティンのアプシス・プログラムとして最もふつうの図像である【図3】。

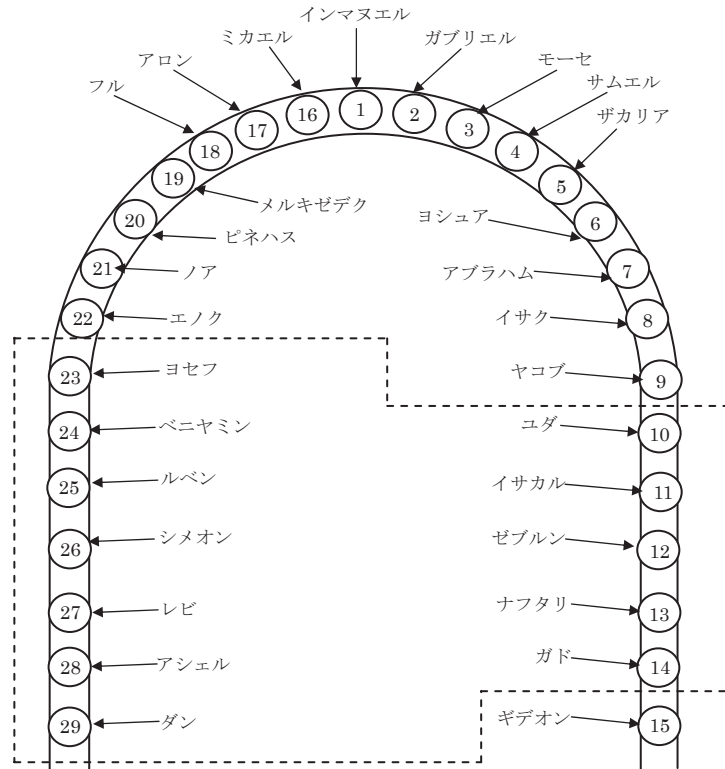
3は「預言者」モーセである（詩98:6⁽⁵⁾では「祭司」と呼ばれる）。3～5、17～18の人物には「^{プロフィテイス}預言者」の銘があり、6～15、及び19～29には「^{ディケオス}正しい人（義人）」との銘が付される。3と対になる17は、モーセの兄にして最初の大祭司アロンである（出28:1他）。4は祭司サムエル、その対が預言者フル（希：Or）⁽⁶⁾で、フルについてはのちに詳述する。5は預言者ザカリア（ゼカリヤ）、19は大祭司メルキゼデク（創14:18、詩109（110）:4、ヘブ5:6他）。6はモーセの後継者ヨシュア（希：Iesous tou Naui）、20に配されたアロンの孫ピネハス（希：Phinees）は「永遠に大祭司の職を継ぐ者」（シラ45:24）と呼ばれる。

7、8、9にはイスラエルの長老アブラハム⁽⁷⁾、イサク、ヤコブ⁽⁸⁾の三代が並ぶ。「最後の審判」図で、しばしばこの3人の坐像が天国に描かれ、救われた者の魂を抱いている。「神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った」（出3:6）⁽⁹⁾の一節も想起しよう。本聖堂ナルテクスには「燃える柴とモーセ」の場面が、西壁中央扉口上という重要な場所に



図1 オフリド、パナギア・ペリブレプトス聖堂アプシス

聖母よ、御腕を支えん



外側に記名は「預言者prophetes」、内側は「義人dikaios」

内はヤコブの息子

図2 メダイヨンの旧約人物



図3 インマヌエルと2大天使

描かれている。出3：6はまさに、モーセが燃える柴から神の声を聴く情景を語る。本聖堂では、異なる場所に描かれた諸場面が、テキスト上、意味上、様々な連関を有している。21はノア、22はアダムから7代目のエノクである。ノア自身は祭司ではないが、洪水ののちに祭壇を築いて犠牲を捧げた（創8：20－9：17）。「エノクは神と共に歩み、神が取

られたので、いなくなった」（創5：24。ルカ3：37、ヘブ11：5、ユダ14も参照）。

ここまでを振り返ろう。ヴォイヴォディチが指摘するように、大祭司／祭司 archiereus/hiereus が多く選ばれていることは注目に値する⁽¹⁰⁾。ヘブ2：17他において、キリストはアロン、メルキゼデクらと予型論的に関連づけられた大祭司とされている。アプ

シス下部の「使徒の聖体拝領」において、キリストはまさに祭司／司祭として振舞っている⁽¹¹⁾。ピネハスは地味な人物であるが、「永遠の大祭司」（シラ45：24）であり、アロンの孫としての資格で登場するのであろう。ペリブレプトスの装飾全体に互って、「祭司」はキーワードとなる。サムエル、ザカリアも祭司である。

モーセの血筋（兄アロン、兄の孫ピネハス、後継者ヨシュア）が重視されていることも見逃してはならない。モーセとアロンは本聖堂ナルテクスの重要な登場人物となる（「燃える柴から神の声を聴くモーセ」、「モーセの幕屋」）。

サムエルの母ハンナ（希：Anna、聖母マリアの母と同名）は不妊で苦しんだが、神によってサムエルを孕んだ。この点はディアコニコン（南小祭室）のプログラムと関わっている⁽¹²⁾。ロマノス・メロドスの「聖母誕生の賛歌」では、マリアの母アンナが出産の喜びを謳う。「あなたは聞き入れてくださいました、主よ、アンナ（ハンナ）が酔っていることをエリに咎められたときに、彼女のことを聞き入れてくださったように⁽¹³⁾。彼女は生まれたのちにサムエルが祭司になるように、主に約束しました。……」次いで旧約における不妊のカatalogとして、アブラハムとサラの夫婦の例⁽¹⁴⁾が語られ、サラが登場する。「（今や喜びに満ちて、彼女は世界に叫ぶ）不妊の女が神の母、我らが命の養い手を産んだ⁽¹⁵⁾。つまり祭司サムエルの母ハンナ（アンナ）、マリアの母アンナ、アブラハムの妻（イサクの母）サラ、そして後述する洗礼者ヨハネの母（ザカリアの妻）エリサベトの4人の女性は、長い不妊に苦しんだのち、神の恩寵によって懐胎した、という共通性をもっている。アブラハムとサラの物語は北小祭室天井、ザカリアとエリサベトの物語は南小祭室天井に描かれ、中央アプシスはマリア、その縁取りに祭司サムエルの描写があるので、聖域内に計4組の不妊の物語が表象されていることになる。

ザカリアについては一言註する必要がある。もちろん彼はゼカリヤ書の預言者ゼカリヤ（希：Zacharias ザカリア）である。旧約末尾近くに置かれる、それほど重要な預言者ではないが、ビザンティン聖堂に描かれる場合はゼカ2：10、4：2、6：12、8：7、11：12（ユダの裏切の予型）、14：1, 4、14：8等の章句を記した巻物を手にする⁽¹⁶⁾。もっとも多く用いられるのは、「エルサレム入城」を予型

するゼカ9：9（「大いに喜び、娘シオンよ。高らかに声をあげよ、娘エルサレムよ。見よ、あなたの王が来る。彼は正しく、救いをもたらす。穏やかに、重荷を負った獣、若い驢馬に乗って来る」）である。エルサレムでキリストを捨てて逃げる弟子たちを予型するゼカ13：7を引用したマタ26：31を採用する聖堂もある⁽¹⁷⁾。神の到来という一般的な言及でなければ、受難を予型する文言が目立っている。

しかしゼカリヤがサムエルの次、ヨシュアの前という重要な位置に置かれる必然性はない。ここには洗礼者ヨハネの父、祭司ザカリアの暗示がある。この位置に隣接する南小祭室は洗礼者ヨハネの礼拝室であり、計4回父ザカリアが描かれる（「ヨアキムとアンナの捧げもの」、「大天使ガブリエルのお告げ」、「民衆の前で口がきけなくなったザカリア」、「『この子の名はヨハネ』と記すザカリア」）。つまりディアコニコンの祭司ザカリアは、聖母伝と洗礼者伝の双方に登場して、両サイクルをつなぐ機能を有している。

預言者ゼカリヤによって、同名の洗礼者の父を示唆する先行例がある。パレルモのカペッラ・パラティーナ東ドームには、変形したペンデンティヴに定型の四福音書記者を配した上で、鼓胴部にはダヴィデ（東）とソロモン（西）の対、洗礼者ヨハネ（南）と預言者ゼカリヤ（北）の対を描く⁽¹⁸⁾。ゼカリヤは手に「大いに喜び、娘シオンよ⁽¹⁹⁾」（ゼカ9：9）との銘をもつところから、ゼカリヤ書の預言者ゼカリヤであることは間違いない。しかし洗礼者ヨハネと対に表されるべきは、明らかに父である祭司ザカリアである。12世紀中葉においてすでに、ザカリア銘の人物は同名の2人を両義的に表すものとして用いられている⁽²⁰⁾。すなわち、ペリブレプトス逆U字壁面の預言者ゼカリヤのメダイヨンは、洗礼者ヨハネの父ザカリアを表してディアコニコンとつながり、また「不妊」という概念によって隣のメダイヨン、サムエルとも関わってゆく。

以上既述した旧約の人物の多くが、「シラ書（集会の書）」の「先祖たちへの賛歌」に挙げられている点も註記しておこう。モーセ（シラ44：23－45：5）、アロン（45：6－22）、サムエル（46：13－20）、ヨシュア（46：1－6）、ピネハス（45：23－25）、アブラハム・イサク・ヤコブ（44：19－23）、ノア（44：17－18）、エノク（44：16、49：14）と、フル、ザカリア、メルキゼデクの3人を

除いたすべてが「シラ書」で言及されている。言及されない3名のうち2人は祭司（ザカリアを洗礼者の父として）であり、フルのみは祭司でもなく、「シラ書」で触れられることもない。なぜこのマイナーな預言者がアロンの次、メルキゼデクの前という重い場所に置かれているのかを論ずるのが、本稿の主たる意図である。

ヤコブの12人の息子

しかしその前に、残った人物を見てしまおう。15の士師ギデオンを除いて、10～14、23～29の12人はヤコブの息子であると考えられる（創35：23～26、出1：2～5、【図4】）。9に描かれたヤコブは、美しい娘ラケルに恋をするが、その姉レアとも結婚する。レアは多産で、ルベン（25）、シメオン（26）、レビ（27）、ユダ、イサカル（希：Issachar、11）、ゼブルン（希：Zeboulon、12）を産む。末子ディナは女性なので、フレスコには登場しない。不妊に悩んだラケルはしかし、ヨセフ（23）、ベニヤミン（24）の二子を得た。ヤコブはまた、レアの召使いジルパによってガド（14）とアシエル（希：Aser、28）を儲ける。ラケルの召使いビルハが生んだのはダン（29）、ナフタリ（希：Nephtali、13）の二人である。10のメダイオンは銘文が剥落して読めないが、ヤコブの子12人のうち、ただ一人登場しないユダがここに当たることは間違いないだろう。母を同じくする者が近く、もしくは対の位置に極力

来るように配慮がなされている。ユダが父ヤコブにいちばん近いのは、マタイの系図（1：1～16）によっても、ルカの系図（3：23～38）によっても、キリストの先祖とされるからであろう。

聖堂装飾におけるヤコブの12人の息子は、現存する限りペリブレプトス聖堂が初出であるが、後続の作例はある。コンスタンティノポリスのコーラ修道院は、帝国宰相テオドロス・メトキティスによって壁画装飾が行なわれた（1316～21年）。エクソ（外）ナルテクスの南ドームは南瓜様に15の区画が設けられて、キリストの祖先を配するプログラムであるが、その下段にはヤコブの息子12人が揃っている【図5】^[2]。

ヤコブはのちにイスラエルと名を改め、12人の息子はイスラエルの十二部族の祖となった。当然のことながら、教父による聖書解釈の伝統ではこれがキリストの十二使徒を予型することになる^[2]。旧約は12という数を象徴的に用いることが多いが、就中重要なのは、「モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた」（出24：4）との一節である。「出エジプト記」24章以下は、モーセが神との間に契約を締結する物語で、幕屋とその備品に関して詳細な取決めがなされる。そののちにモーセは、神から十戒の石板を受けとる。これらの情景は、「モーセとアロンの幕屋」（東壁北側）と「十戒を受けとるモーセ」（西壁中央）

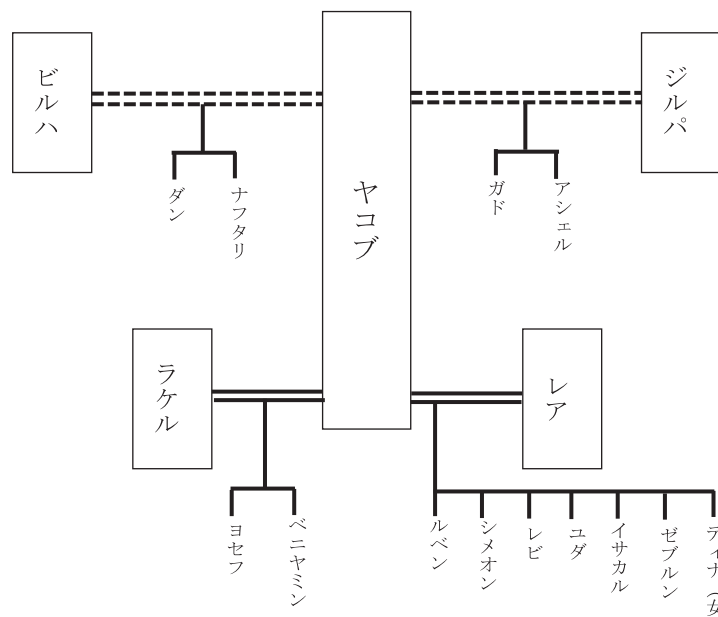


図4 ヤコブの息子たち



図5 イスタンブール、コーラ修道院ドーム、キリストの祖先

として、ナルテクスに描かれている。

すなわちアプシスの周囲に描かれたヤコブの12人の息子は、十二使徒を示唆して堂内のキリスト伝サイクルにつなげる効果をもつ²³だけでなく、モーセと十二部族の連結がナルテクスに描かれた聖母予型諸場面をも改めて想起させるのである。「出エジプト記」を読み進めれば、モーセは従者のヨシュア（メダイオン6）とともに神の山に登り（24：13）、長老たちに告げる。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、アロン（メダイオン17）とフル（同18）とがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい」（出24：14）。この一節がフルを描く理由の一つである。

パナギア・ペリブレプトス聖堂の装飾プログラムは入念に計画され、堂内各図像は密接なネットワークによって結ばれている。その網の目をできる限り読みとり、解きほぐすことが私たちの課題である。モーセ、ヨシュア、アロン、フル、ヤコブの12人の息子の組み合わせは、ナルテクスの「モーセとアロンの幕屋」、「十戒を受けとるモーセ」とつながり、したがってモーセが山のふもとに築いた祭壇（出24：4）は、アプシスに設置された現実の祭壇と重なることになる。メダイオンの人物の多くが祭司であるのは、祭壇で儀式（奉神礼）を執行するためである。

アブラハム・イサク・ヤコブの三代が、「神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った」（出

3：6）を介して、ナルテクスの「燃える柴とモーセ」に連結することは述べたが、アウグスティヌスらの聖書釈義によれば、三代は同時に神の「三位一体」を予型する。本聖堂は強迫観念のように「三」、「三位一体」を繰返している。プロテシス（北小祭室）天井の「アブラハムの饗宴」は「三位一体」の直接的な予型であるし、これに対面する「エマオの晩餐」はキリストと2弟子、すなわち三人物を描く。ディアコニコンには「炎の中の3人の少年」（ダニ3：8-30）、聖母伝には「マリアを祝福する3人の祭司」が描かれる。後者の3祭司は、ナルテクスの「エゼキエルの閉ざされた扉」に登場する3祭司と同一の容貌をしている。同じくナルテクスの「ネブカドネツァルの夢解き」に現れる天使は三頭である、等々。

最後に残ったメダイオン15には、士師ギデオンが描かれる。このギデオンのみ、私にはコンテクストが不明である。旧約の預言者や長老をコンク周辺の弧に配し、ヤコブの息子たちを下部の垂直壁面に並べるという大枠の中で、ただ一人イスラエルの士師ギデオンが、右最下部を占めている。キリスト教図像学にギデオンは、「土は乾いているのに羊の毛だけが露で濡れている」（士6：36-40）奇跡が、マリアの処女懐胎を予型する²⁴ものとしてしばしば登場する。ミハイルとエウティキオスが描いた聖堂においても、スタロ・ナゴリチャネ（ナゴリチノ）（マケドニア）の聖ゲオルギオス（ギョルギ）聖堂で、濡れた羊の毛を手にするギデオンが描かれている。しかし聖母予型を並べたペリブレプトスのナルテクスには、ギデオンが登場しない。名高い聖母予型であるギデオンをナルテクスに描かなかったの

で、画家たちはここに士師を描いたものだろうか。

預言者フルの役割

さて、以上で29のメダイヨンの意義を概観したが、最後に詳しく論ずべきは18の預言者フルである【図6】。旧約の中に「フル」の名をもつ者は、5人登場する。アラムの子孫（創10：23、代上1：17）、ユダの子孫（出31：2、出35：30、出38：22、代上2：19-20、代上2：50、代上4：1、代上4：4、代下1：5）、ミディアンの王（民31：8、ヨシュ13：21）、エルサレム半地区の区長（ネヘ3：9）、そして本稿の対象となるモーセの協力者である（出17：10-12、出24：14）。出24：14がフルの存在を説明し得ることは述べたが、それだけでは不足である。イスラエルがアマレク（エサウの孫の子孫）と闘ったときの記述を読もう。モーセはナイル川を打って水を血に変えた神の杖（出7：17以下）、ホレブの岩を打って水を出し、民をうるおした神の杖（出17：6）をもって、丘の頂に立った。

ヨシュアはモーセが彼に言ったとおりに行ない、アマレクと戦った。モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げると、イスラエルが優勢となったが、彼が手を下ろすと、アマレクが優勢となった。モーセの両手は重くなって下がった。そこで彼らは石を取ると、（それを）彼の下に置いた。モーセはその上に座った。アロンとフルは、ひとりずついずれかの側から、彼の手を支えた。（こうして）モーセの両手は日没まで支えられていた。ヨ

シュアはアマレクとその民を剣で殺し、（その）すべてを敗走させた。（出17：10-13）²⁵⁾

アロンとフルがモーセの腕を支えて挙げさせる限り、神の加護が失われることはなかった。今ペリブレプトスのアプシスでアロンとフルが支えるのは、モーセの腕ではない。コンクでただ独り、神に祈りを捧げるために両腕を挙げ続ける聖母マリアの、その腕を二人は支えているのである。マイナーな人物フルが、このように重要な場にいるのは、聖母の腕が疲れたときに、それを支えるためなのである。この解釈は牽強付会であろうか。傍証をいくつか挙げる。

まずはこの箇所に関する、初期教父たちの解釈を見よう。非キリスト教徒にとっては小さなエピソードであっても、この箇所は教父たちに読まれ、解釈されてきた。

ヨハネ・クリソストモスは『ヨハネ福音書に関する第14説教』²⁶⁾において、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」（ヨハ1：17）という一節を、「出エジプト記」との対比で解釈している²⁷⁾。アロンとフルがモーセの左右に立って腕を支えることと、キリストが両腕を伸ばして磔にかかったことを対比して、「（律法が）与えられた」と「真理が現れた」の違いに対応するとクリソストモスは述べる。アウグスティヌスも『詩篇第43篇註解』において、詩篇43全体をキリスト受難の予型として解釈しつつ、モーセとその腕を支えるアロン、フルの3人を十字架の予型とする²⁸⁾。



図6 預言者フル（左の赤いメダイヨン）

アマレクの戦いにおける3人を、視覚的に「磔刑」になぞらえた解釈である。現存する八大書のうち、Cod.Vat.gr.747 (f.94)【図7】；Topkapı Sarayı Library (Istanbul)、Cod.G.I.8 (f.207v)；Smyrna (Izmir)、Evangelical School Library、Cod.A.I (f.86)；Cod.Vat.gr.746 (f.202v) の4冊がこの箇所挿絵を有しており、いずれも「磔刑」と似た挙措でモーセを描いている⁽²⁹⁾。

ビザンティン世界でよく読まれ、挿絵入り写本⁽³⁰⁾の多いナズィアンゾスのグリゴリオスも、説教でこの箇所を言及している。372年に書かれた「第12説教」は、政争がらみで設けられたカッパドキアの新教区に主教として赴任するよう求められた際に、気の進まぬ理由を述べたもの⁽³¹⁾。

山上でモーセの両腕を支えるというアロンとフルの仕事は、アマレクが十字架によって打ち負かされた、ということをとどの昔にあらかじめ示して（予型して）います。（しかし）私たちに相応しくもなく、当てはまりもしないものとして、私はできれば通り過ぎたいのです。なぜならモーセは彼らを、法の授与者としての仕事を分かたつために選んだのではなく、祈りに際しての助けとして、彼の腕の弱さの支えとして選んだからです。（12.2）



図7 Cod.Vat.gr.747, f.94 アマレクとの闘い

ここでグリゴリオスは、クリソストモスやアウグスティヌス同様、3人の姿勢を十字架の予型としつつ、モーセの重要性、アロンとフルの援助者としての控えめな役割を語っていると言えよう。このように教父文献を紐解いても、出17:12はよく知られていたことがわかる。

傍証の第2点目は、聖母に関する予型論的解釈である。教父による旧約解釈の伝統では、アロンとフルに支えられるモーセの姿勢は、磔刑のキリストを予型する。しかしペリブレプトスのアプシスに立つのはキリストではなく、聖母マリアである。なぜモーセがマリアに置き換えられるのか。それを理解するためには、アマレクの戦いを記述した「出エジプト記」の直前の箇所を想起しなければならない。宿営地で水が得られなかったイスラエル人は、指導者モーセに水を求めて詰め寄る。

モーセは主に向かって叫んだ。「この民をどうすればよいのでしょうか？ 彼らはわたしに石を投げつけようとしております。」すると主はモーセに向かって言った。「この民の前を歩き、民の長老たちの一部を伴うがよい。そしておまえたちを撃った杖をおまえの手に取り、進むがよい。見よ、わたしはおまえが来る前に、ホレブの岩の上に立っている。おまえはその岩を撃つがよい。するとそこから水が出て、民は（それを）飲むであろう。」モーセは、イスラエルの子らの前で、そのとおりにした。（出17:4-6）⁽³²⁾

ホレブの岩から水をあふれさせるモーセの図像は、古く初期キリスト教石棺などでも「救済の範例」として用いられてきたが、これはまた聖母マリアの予型としても語られる。オリンポス（トルコ、リキア地方）主教メトディオス（311年頃殉教）の「シメオンとアンナに関する説教（キリスト神殿奉献）」の一節を見よう。キリストを抱きとった祭司シメオンの口を借りてメトディオスは聖母賛美を連ねる。「モーセと燃える柴」（出3:2）や「アロンの芽吹く杖」（民17:8）⁽³³⁾といったお馴染みの聖母の予型イメージに加えて、シメオンはホレブの岩の奇跡を聖母に重ねる。

さらに堅くごつごつした岩は、あなたから全世界

界のために湧き出でる恩寵と快復を思い起こさせるものですが、渴いた場を出て荒野にある弱った人々のために、ふんだんに癒しの美酒をもたらすのです³⁴。

元来聖母と水のイメージは親和的であった。マリアは通常の「受胎告知」以前に、井戸（泉）で水を汲んでいるところに天使の訪れを受けている（ヤコブ原福音書 11）。ちなみにマリアの母アンナもまた、泉のほとりで天使から妊娠のお告げを受けた³⁵。しかし何より重要なのはオランスの聖母の泉水施設の問題である。

コンスタンティノポリスの北西に位置するブラケルネ Blachernai 修道院は、女帝プルケリアによって 450 年頃にバシリカが建立された、帝都で最も著名な聖母を祀る巡礼地であった。5 世紀後半にはパレスティナから聖母のマント（マフォリオン）がもたらされ、いっそうの隆盛を見る³⁶。聖堂は 1070 年に被災し再建されたが、それに遡る 10 世紀半ば頃、修道院には聖母の掌から水の湧き出でる奇跡の大理石製イコンが存在した³⁷。このイコンに最も近いとされるのが、マンガナの聖ゲオルギオス聖堂附近から出土した大理石断片である【図 8】³⁸。縦 200 センチに及ぶ大型大理石イコンは、聖母の掌に穴が穿たれ、そこから水が噴出する仕掛けであった。まさに人々に「癒しの美酒」を与えたので



図 8 マンガナの聖母、イスタンブール考古学博物館

ある。

オランスの聖母の掌から水がほとばしる大理石製イコンは、これ以外にも多く残っている³⁹。つまり多くのビザンティン人にとって、公共の泉水施設において、オランスの聖母の掌から水が湧き出す光景は眼に馴染んだものだった。モーセがホレブの岩を打って水を湧き出させたように、聖母マリアはその掌から常に水を与えて人々の渴きを癒す。ここにおいて、ペリブレプトス聖堂アプシスのマリアは、モーセと可換の存在となる。かつてアロンとフルがモーセの両腕を支えて、アマレクとの闘いに勝利したように、今日、そしていつまでも、アロンとフルは聖母の腕を支え続ける。神への祈りが途切れぬよう、また聖母の恩寵が信徒にいつまでも注ぐように。

注

- (1) C. Grozdanov によるモノグラフィ的な論文集が予告されているが、今のところ未刊と思われる。C. Grozdanov, *Church St. Kliment Ohrid*, Zagreb 1988 は小型のガイドブックである。J. Poposka, *Church Mother of God Peribleptos (St. Clement)*, Ohrid 2006 は、現地聖堂の管理をする学芸員が著した奇著。学問的な価値は皆無であるが、カラー写真を多数掲載する。
- (2) これまで筆者が発表したのは以下。「ビザンティン聖堂装飾のイコンとナラティブ」甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ中世の時間意識』知泉書館、2012 年、309-35 頁。
- (3) グロズダノフはこの主教たちにオフリド的性格が認められると論じている。Ц. Грозданов, “Попрција архијереја у олтару цркве Богородице Перивлепте у Охриду,” *Zograf* 32 (2008), pp.83-90.
- (4) 拙稿「アギイ・アナルギリ聖堂（カストリア）東壁面のプログラム」『美術史研究』41 冊、2003 年 12 月、65-80 頁参照。
- (5) ヘブライ版（新共同訳）では 99：6。以下詩篇の引用はギリシア語訳（セプトゥアギンタ）による。
- (6) ペリブレプトス聖堂に関して、最も詳細な記述を行なった P. Miljković-Pepek, *ДЕЛОТО НА ЗОГРАФИТЕ МИХАЛО И ЕУТИИЈ*, Skopje 1967, p.48 では銘が読めず「不明」とされていた。D. Vojvodić, “О ЛИКОВИМА СТАРОЗАВЕТНИХ ПРВОСВЕШТЕНИКА У ВИЗАНТИЈСКОМ ЗИДНОМ СЛИКАРСТВУ С КРАЈА ХИИ ВЕКА,” *ZRVI* 37 (1998), pp.121-153. で「フル」との同定がなされた。
- (7) プロテシス（北小祭室）天井南側の「アブラハムの饗宴」にも登場。
- (8) ナルテクスの「ヤコブの梯子」と「天使と闘うヤコブ」にも登場。「ヤコブの梯子」は天と地をつなぐものとして、マリアを予型する。
- (9) この章句は教父たちによって、「三位一体」の予型と解釈されてきた。後出註 22 参照。ナズィアンゾスのグリゴリオス『神学説教』4.19 等も参照。
- (10) Vojvodić, art. cit.. 13 世紀末の聖堂（パナギア・ペリブレプトス、アリリエ、プリレプの聖ニコラ、アトスのプ

- ロタトン)において、旧約人物像を祭司として描く傾向が強まることを論じる。オフリドに関しては、フルを同定する (p.124) とともに、「永遠の祭司」(民 25 : 10-13) とされたピネハスが、キリスト教主教のフリーズと連続し、フリーズ中央には主の兄弟ヤコボ (10月20日の典礼で「祭司」とされる) が配されることを指摘した。卓見のようにも思われるが、ピネハスと対のヨシュアは祭司ではない。
- (11) 実際に14世紀の聖堂では、しばしば「使徒の聖体拝領」のキリストが、大祭司の服装をしている場合がある。テサロニキの Agios Nikolaos Orphanos、パニャニ (マケドニア) の Sv. Nikita (画家ミハイルとエウティキオス)、Dečani、Mateić、プリズレンの Soter (以上キリスト2度)、Ravaniča (キリスト1度)。E. Kourkoutidou- Nikolaidou, *The Church of Christ the Saviour*; Athens 2008, p.113, n.48.
- (12) 詳細は別稿で論じるが、当面前掲の拙稿「ビザンティン聖堂装飾のイコンとナラティヴ」参照。ペリブレプトスの装飾は、網の目のように複雑に関連し合っている。そのネットワークの妙が、ミハイルとエウティキオスの真骨頂である。
- (13) 七十人訳「第一列王書」1:14。新共同訳ではサム上1:14で、サムエルの母ハンナについて語っている。ギリシア語でハンナはアンナ、つまりマリアの母アンナは、サムエルの母アンナの不妊の苦しみを、同名のよしみで自らに重ねている。
- (14) 創18章。
- (15) P. Maas, C. A. Trypanis, *Sancti Romani Melodi Cantica. Cantica Genuina*, Oxford 1963, 35 ζτ, η.
- (16) A.-M. Graavgaard, *Inscriptions of Old Testament Prophecies in Byzantine Churches*, Copenhagen 1979, pp.88-92.
- (17) アトス山ドヒアノウ修道院、1568年。
- (18) A. Vincenzi (ed.), *La Cappella Palatina a Palermo*, Modena 2011, pp.118-121.
- (19) 新共同訳「娘シオンよ、大いに踊れ」。
- (20) E. Kitzinger, *The Mosaics of St.Mary's of the Admiral in Palermo*, Washington, D.C. 1990, pp.139-140. ちなみにカベッラ・パラティーナと関係の深いラ・マルトラーナ聖堂の鼓胴部には、イザヤ、ダヴィデ、モーセ、ダニエル、エリシャ、エリヤ、エレミアと並んでゼカリヤが選ばれている。手にする巻物の銘は「大いに喜び、シオンの娘。讚えよ、エルサレムの娘。見よ、汝の王」(ゼカ9:9)。このゼカリヤには、周囲の図像を含めてヨハネの父のほめかしはない。
- (21) P. A. Underwood, *Kariye Djami*, vol.1, London 1966, pp.49-59. なお3区画が余るので、加えてファレズ(ユダの息子、創38)、ザラ(ユダの息子、同)、エスロム(ファレズの息子、マタ1:3)を採用。上段の15人のうち、ペリブレプトスと重なるのはノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、エノクの5人である。
- (22) アウグスティヌス『ヨハネ福音書註解』11.8、同『新約聖書に関する説教』80.3、『福音書の一致について』II.3等。アウグスティヌスはアブラハム・イサク・ヤコブの3長老(族長) patriarchs = fathers から一つの民族イスラエルが生じ(三位一体)、そこからさらに12部族=十二使徒が生じたと解釈している。エイレナイオス『異端反駁』I.18.4は、出24:4、ヨシュ4:3、ヨシュ3:11-13、王上18:31等、旧約における「12」のシンボリズムを総ざらいした。
- (23) アブシスに接するペーマの北壁面には「ガリラヤ山におけるキリストの顕現」と「トマスの不信」の復活2主題が描かれ、ともに十二使徒全員を描いている。
- (24) アンブロシウス『寡婦について』3.18; アウグスティヌス『詩篇註解』138.7等参照。
- (25) 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書II 出エジプト記』2003年、河出書房新社、pp.89-90.
- (26) 『ヨハネ福音書註解』の挿絵入り写本は少なく、該当箇所に挿絵を有する写本は現存しない。K. Krause, *Die illustrierten Homilien des Johannes Chrysostomos in Byzanz*, Wiesbaden 2004, pp.59-66.
- (27) Sister Thomas Aquinas Goggin (transl.), *Saint John Chrysostom. Commentary on Saint John the Apostle and Evangelist (The Fathers of the Church)*, vol.1, New York 1957 (1969), pp.130-40.
- (28) 「十字架のしるしにおいて征服された、抵抗するアマレクはどこか。』『アウグスティヌス著作集』第18巻II、教文館、2006年、p.358.
- (29) K. Weitzmann, M. Bernabò, *The Byzantine Octateuchs (The Illustrations in the Manuscripts of the Septuagint, vol.II, Octateuch)*, Princeton 1999, vol.1, pp.169-170; vol.2, figs.726-29.
- (30) 挿絵入りグリゴリオス説教集については以下参照。G. Galavaris, *The Illustrations of the Liturgical Homilies of Gregory Nazianzenus*, Princeton 1969. ここで論ずる箇所の挿絵はない。
- (31) M.-A. Calvet- Sebasti, *Grégoire de Nazianze, Discours 6-12*, (SC 405), Paris 1995, pp.350-52. グリゴリオスのフルらへの言及を網羅的に挙げることはしないが、この巻に限っても、6.17 (p.164) と 11.2 (p.332) でもこのエピソードに言及している。
- (32) 秦訳、前掲書、p.88.
- (33) 新共同訳では17:23.
- (34) PG 18: 9-408; A. Roberts and J. Donaldson (eds.), *The Ante-Nicene Fathers*, vol.6, pp.383-93, Ann Arbor 1966 (rep.).
- (35) ペリブレプトス聖堂、コーラ修道院等、後期ビザンティン壁画のイコノグラフィー。「ヤコブ原福音書」には泉の記述はない。不妊の女性の胎が開かれて子を孕む、ということと、水のイメージの関連は民俗学的問題かもしれない。聖母伝には「水の試み」(ヤコブ原福音書16)という主題もある。「水の試み」の予型論的解釈については、ミハイルとエウティキオスの描いたストゥデニツァ修道院「王の聖堂」に関する別稿を執筆予定。
- (36) R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. 1er partie: Le siège de Constantinople et le patriarcat oecuménique. Tome III, Le églises et les monastères*, Paris 1969², pp.161-71; C. Mango, "The Origins of the Blachernai Shrine at Constantinople," in *Acta XIII Congressus Internationalis Archaeologiae Christianae, Split-Poreč (25 September-1 October 1994)*, Vaticano-Split, 1998, vol.2, pp.61-76.
- (37) A. W. Carr, "Icons and the Object of Pilgrimage in Middle Byzantine Constantinople," *DOP* 56 (2002), pp.75-92, esp. n.13.
- (38) イスタンブール考古学博物館蔵。R. Demangel and E.

Mamboury, *Le quartier des Manganes et la première région de Constantinople*, Paris 1939, pp.155ff.. ブラケルネ聖堂の聖母イコンを原型として、浮彫の「オランスの聖母」はしばしば掌や膝から水が噴出する泉水施設として機能した。A. Grabar, *Scultures byzantines du moyen âge, II (XIe-XIVe siècle)*, Paris 1976, pls.I-II; *Splendeur de Byzance*, exh.cat., Bruxelles 1982, Sc.10, p.84; R. Lange, *Die byzantinische Relieffkone*, Recklinghausen 1964, figs.1, 47; K. Loverdou- Tsigarida, "The Mother of God in Sculpture," in: M. Vassilaki (ed.), *Mother of God. Representations of the Virgin in Byzantine Art*, Benaki Museum, Athens 2000, pp.237-49, esp.239f.; H. C. Evans and W. D. Wixom (eds.), *The Glory of Byzantium. Art and Culture of the Middle Byzantine Era A.D.843-1261*, the Metropolitan Museum of Art 1997, no.12, pp.45f., no.291, pp.450ff.; Vassilaki (ed.), *Mother of God*, no.37, pp.354f..

(39) 前註参照。

【図版出典】

図7 : K. Weitzmann, M. Bernabò, *The Byzantine Octateuchs*, Princeton 1999, vol.2, fig.726.

図8 : M. Vassilaki (ed.), *Mother of God. Representations of the Virgin in Byzantine Art*, exh.cat., Athens 2000.

それ以外は益田作成、及び早稲田大学調査隊撮影。